

JPNタク車いす問題

「2人作業で時間短縮」

東タク協理事会で議論



(上から時計回りに) 車いす乗降問題で「全員の努力」を強調する川鍋会長、「路上での乗車は難しい」と訴える根本委員長、清田社長は作業時間の短縮方法を紹介(20日、市ヶ谷)



東京ハイヤー・タクシー協会(川鍋一朗会長)は20日、市ヶ谷の自動車会館で理事会を開催、トヨタの新車専用車「JAPANタクシー(JPN TAXI)」の車いす乗降問題をめぐり議論を交わした。車両の横側スロープを出すため、乗り場・施設以外の路上から乗せるのは難しい実態や、2人で作業すれば時間が短縮できる例が示された。根本克己環境・車両資材委員長は「街中で乗車させるのは時間がかかり、乗務員の危険も伴う。構造上、

限界があることを利用者に知ってもらう必要がある。乗務員に寄り添いながら、障害者の方にきちんと乗ってもらえる仕組みにしなければ」と訴えた。乗車の準備では「1人だと15分くらいかかるが、2人なら6分でできることを当社で確認した。慣れれば5分を切るだろう」とし、「例えば、乗り場で待っているドライバーが手伝えれば、周りで見ている人からも『タクシーが一生懸命やっている』という評価につながる」と呼びかけた。山手福祉グループ・サンベスト東信(板橋区)の清田明徳社長は、独自の木製プレートを使って車いす乗降に役立っている実例を紹介した。

「1人でも5〜6分で、できるようになった。かなり狭いところでも使える。参考になれば」と話した。根本委員長は乗降時間短縮の具体策として「トヨタはシート裏に(スロープの)組み立ての順番を書くなど、マイナーチェンジしてくれる」と説明。東京タクシーセンター側から「乗り場にスロープを置いてはどうか」と提案があったことにも触れた。

川鍋会長は「トヨタは一生懸命、改善に向けてやってくれている。われわれは乗務員が技術を身につけられるよう、環境整備にまい進する。お客サイドにも理解してもらえないようにしていく。なじんでいけば、セダンよりも確実に交通弱者に優しい車になる」と強調した。

さらに「全員で努力して『タクシーは進化した』と、世の中の信頼を勝ち得なければと思う。タクシーがタクシーとしてあり続ける。日本の公共交通機関は海外と比べて見劣りしない。安心、安全、プラス利便性を築けるよう努力したい」と述べた。